

フジタにおけるC I Sの展開

株式会社フジタ 四国支店 南の谷（4）作業所
土木学会員
川上 正晴

1. 当社におけるC I Sの流れ

①C I Sの導入

当社におけるC I S（Corporate Identification System）は、1985（昭和60）年4月に始まる。

これは企業イメージを刷新し、業績の向上と社内の活性化をはかるのを目的として、基本要素として

①企業理念の確立

②社員行動のアイデンティティーづくり

③社内外コミュニケーションの活性化

の3つを掲げて、それを基にクライアント・ファースト（顧客第一）、ハイテク化、ハイクオリティーの実現をはかろうとするものであった。

1986（昭和61）年4月1日フジタのC I Sに魂を入れる意味で、今までの経営理念にかわって、企業理念を制定した。

企業理念

自然を 社会を 街を

そして人の心を 豊かにするために

フジタは たゆまず働く

自然や社会や街を、保全し、手入れを行うことにより、国土を有効に利用し、国民の福祉のために、いいかえれば人の心を豊かなものにするために開発や建設を行うことを会社全体の使命としたもの。そのために、当社はプロの集団として自分の力を磨くのに「たゆむことなく」（気をゆるめず）活動していくことを、「理念」としたものである。

これは、ますます多角化していくフジタのスタンスをはっきりさせたもので、社員一人一人の行動のバックボーンとなっている。

また1990（平成元）年8月には、新企業スローガン「“高”環境づくり」を決定した。新スローガンは、（旧）スローガンの「先端技術と建設を結ぶ」を更に発展させたもので、21世紀を目前に企業としてどうあるべきかを明快に謳い上げたものである。先端技術を建設の中で生かし、快適で豊かな環境（人間環境・社会環境・地球環境）を創造しようとするフジタの意志と姿勢の宣言であると同時に、社会に対して企業としての責任を全うする旨の明示でもあった。

②当社におけるC I Sの概念

一般市場における商品を持たない建設業の企業イメージは、企業から送り出される情報の質と量によって決定される。効果的にイメージがつくられるためには、まず情報（企業の思想と技術）と媒体（人および意識）の強化が必要となる。しかし思想や技術あるいは人の意識の強化は容易に進むものではなく、目に見える効果が上りにくい。効果が見えなければ、イメージは上がらないし活動も持続しない。

こうしたことから、当社のC I S計画では企業における情報（技術と思想）の生産を高めるとともに

目に見える効果を具体的なものとして、媒体（人と意識）の力を強化し、運動を不断なものにしていくことが重要な課題となる。

この基本概念に基づき、フジタのC I Sは

⑨企業理念、スローガンを積極的に表現するものとして設計され、社会に向けてフジタの顔をつくる「デザイン計画」

⑩社会とフジタを結ぶ双方向コミュニケーションをはかるためのデータベース、ソフト開発の基盤となる情報の蓄積整備をしていく「情報計画」

⑪企業の行動、社員一人一人の活動こそが、企業イメージを造りあげる最も重要な役割をはたすという事で、「“高”環境づくり」という社会への約束の下に、これらの活動を体系化する「活動計画」

の3つの計画から構成され、それぞれの関連部署が中心となって具体案を立案、活動を推進している。

③C I S計画の展開

当社におけるC I Sの導入から約10年。「デザイン計画」並びに「情報計画」は一定の成果を達成していると考えらる。

具体的には、

ア. 目に見えるシンボルとして・スポーツ全般への応援

ー94年度天皇杯優勝チーム「ベルマーレ平塚」は、当社のサッカーチームが母体となってつくられた。

女子のサッカーチームでは「天台マーキュリー」がある。

また女子陸上部も健闘している。

イ. 企業の本社ビルを地下1F～3Fまで一般開放したアミューズメントスペース「ヴァンテ」

そのなかにあるロンドンより移設した「おもちゃ博物館」等

建設業としてのイメージを常に変えていっています。

ウ. 全店のC I S発表会を開催して、各部署の相互研鑽を行ってます。

エ. 建設業界の新原価管理システム「SAGEST」を導入、その他各種新技術ーアーバンオアシス等の展開を行ってます。

今後は、より一歩進んだ形でのC I Sの活動展開を必要とされてくる。

そのひとつの形態として、「マインドアイデンティティー」があげられる。ヒジュアルな面よりさらに一歩進んだ「精神運動」となるのではないだろうか。

それは企業の構成員である社員一人一人が「共通の価値観」の上にたち、それにより造り出される企業体質、いいかえれば企業文化から滲み出てくるような強い個性をもった活動となるべきである。

そのためには、日常の業務活動の中で、「真のC I S」とは何か、社会における当社の存在意義、社会が認めるフジタの個性をひとつずつ造りあげて行く必要がある。それは、「フジタ」らしさのブランドづくりであり、オーダーメイドの良さの発揮である。

「共通の価値観」とは何か。具体的なイメージとしては、「お客様」が当社の経営を見て、また企業の姿勢を見て「良い会社」「素晴らしい会社」であると感じてくれる事である。

それは単に現在の「お客様」だけにとどまらず、社会全体に対して広くアピールして行く事であり、また企業の内部だけにとどまる独善的な活動ではなく、社会全体に広く認知されるものでなくてはならないと考える。

2.（対外的な評価としての）SKIPへの展開

四国においては、1991（平成2）年末より、建設省四国地方建設局が中心となって「四国の未来を創る→社会資本の整備という重要な役割を担う建設事業を推進していく為→地域の方々に対して建設事業への理解を深めてもらおうとする活動」つまり、建設業のイメージアップを図る官民一体となった活動『SKIP（Shikoku Kensetu Image Up Program）』が展開されています。



〔SKIP〕の構成

ACT1：もっと知らせよう”広報”

様々な広報活動、イメージづくり直接体験・交流

ACT2：もっと素敵に”現場リフレッシュ”

現場環境の改善、就業環境の改善

ACT3：もっと広げよう”交流促進”

見学会、現場研修を通してのふれあい

この一連のイベントの中では、毎年度四国の中で行われている官庁準官庁工事を対象として、知らせたい、伝えたい、広げたい「いい現場」「いい仕事」をテーマとして、建設業のイメージアップに対する優れた取り組みを表彰する「SKIPグランプリ」が開かれています。

その中で、施工部門においては「いきいき現場大賞」、社会資本の整備部門においては「きらめき創造大賞」が設けられています。

「いきいき現場大賞」は、建設現場の環境改善、就業環境の改善や、地域とのふれあい、広報活動への取り組みの『自慢』を表彰するものです。

フジタ四国支店としても、日頃のCIS活動を対外的にもアピールする絶好の機会という事で、SKIPグランプリの始まった1992（平成3）年より、官庁工事を中心とし毎年数多く応募してきました。

【当社各年度毎SKIPグランプリ応募件数】

①1992（平成3）年度 SKIPグランプリ'92 8件応募

②1993（平成4）年度 SKIPグランプリ'93 8件応募

③1994（平成5）年度 SKIPグランプリ'94 12件応募（内7社 部門、同一種類も含む）

この中でも、SKIPグランプリ'94に応募した『南の谷樋門改築第3工事』は「たちよりやすい工事現場」として高い評価をいただき「準グランプリ」の栄冠に輝く事ができました。

また第2次選考に残りながら受賞する事はできませんでしたが、『香川労災病院建設工事における、EKO（地球にやさしい環境づくり→これはまた企業の社会的責任におけるフジタ全体のものでもある）活動』や、高知市における業務代行方式による土地区画整理→宅地造成工事『初月（みづき）造成作業所の開発設計コンセプト「自然と調和のとれた街づくり」』はスキップグランプリ選考委員の方に高い評価を受ける事ができました。

またこのSKIPグランプリからの水平展開として、日本道路公団高松建設局主催の道路公団工事を対象として今年度より始まった『CAP（チャージング アップ プログラム）活動表彰』において、「徳島自動車道徳島インターチェンジ工事」が賞をいただくことができました。

これは、同工事が「道」をテーマとし、国道沿いの仮囲いを『縦貫道ギャラリー』として地元幼稚園小学校より一般公募した「夢ある大壁画」を展示したり、仮設の保安灯でクリスマスツリーを掲げたりして地域に対して十分な配慮をした事。盛土運搬の安全管理において、五団体安全部会長表彰を受賞する等、ダンプトラックの交通安全対策、近隣沿道対策に万全を期した事が高く評価された為です。

3. 南の谷樋門改築第3工事における『建設工事のイメージアップ』について

それでは、南の谷樋門改築第3工事においては、どんなイメージアップを展開したのか考察してみる。

①南の谷樋門改築第3工事のイメージアップ計画

㊤工事概要

発注者：建設省四国地方建設局

工 期：1992（平成3）年11月14日～1995（平成7）年6月30日

工事場所：高知県吾川郡伊野町大内

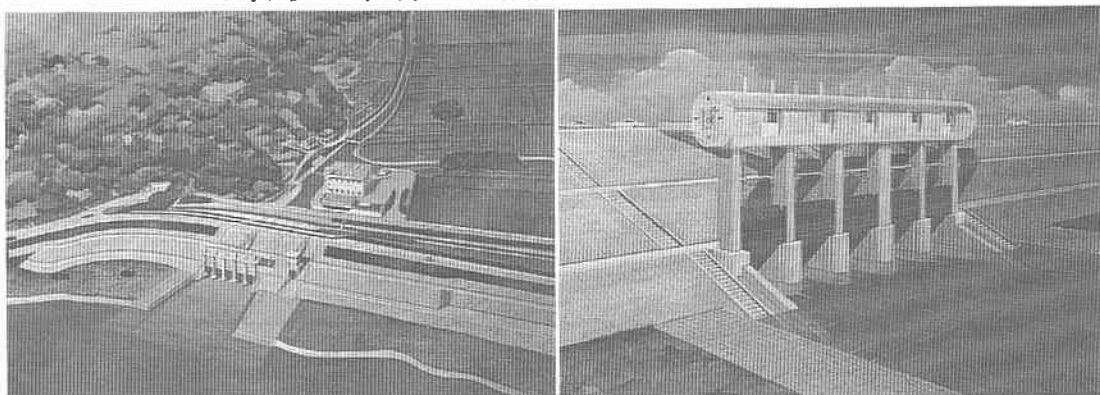
工事概要：水路ボックスカルバート5.4m（W）×2.7m（H）×47.0m（L）×5連

工事目的：同町は高知市の西側に位置し、高知県の三大河川のひとつ仁淀川を擁している。

同地区は仁淀川とその支流南の谷川が流れており、隣接する日高村の排水等が、土佐市にさえぎられて、当地区に集まり、昔から水害に悩まされてきた。最近では、昭和51年、52年と地域全体が連続して水没した。

今回の工事は、この南の谷地区の排水能力をアップするため、建設省の南の谷ポンプ場の樋門を改築する工事である。

地域の状況：同地区は世帯数55軒の純然たる農村地区であるが、工事場所に接して県道土佐伊野線（伊野町⇄土佐市を結ぶ）が走っており朝夕のラッシュ時には、時間当たり約800台6時から18時の間の12時間交通量5,500台である。



㊤イメージアップ計画の概要

当工事は、堤防上道路を切り回し、県道部分を迂回させて、県道とポンプ場の間を掘削し、ボックスカルバートで水路を造る工事であり、切り回し県道部分にビジュアルな形で「地域とのふれあい」をテーマにしたものをつくる事により、建設業のイメージアップ（治水事業、ふれあい、地域へのアピール、技術のアピール）を行う。

また当地区は、土佐（高知県）の建設事業の先人『野中 兼山』の遺跡が多数ある場所であり、その「八田堰（ちょうど現場の前にある仁淀川の堰）」や「鎌田用水（現場の中を流れる）」等の紹介を兼ねて、仁淀川の治水事業に関連して建設事業に対する理解を深めてもらう。

具体的には、

ア. 切り回し県道部分に見学場所を設置し、「仁淀川の治水事業」のパネル、パンフレットを置き、イメージアップをはかる。

イ. 生徒数約200名の地元「川内小学校」の作業所見学会等を開催し、この見学会をテーマに作文を募集、何らかの形で発表する。

の方法を検討した。

◎イメージアップ作戦

1993（平成4）年南の谷作業所は、SKIPの一環として建設省四国地方建設局より、イメージアップモデル”現場”に指定された。そして「見学所」の設置、運営が当社に委託され、この見学所を通して、建設事業を地元に対してイメージアップする活動を展開することとなった。

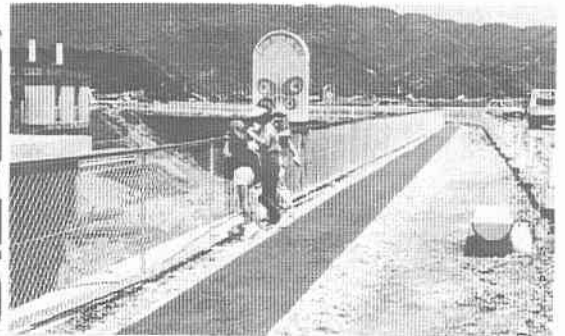
ア. 高知県の三大清流仁淀川の自然とマッチした、地元の間伐材使用のログハウス見学所を設置。

その内容としては、

- I. 誰がいつきても、現場の内容がよく解るように、女性アナウンサーのエンドレステープによる現場説明の機械を導入。
- II. 工事現場周辺を遊歩道として整備。擬木ベンチ、仁淀川の風物詩ピクトレル看板を設置したりユニークな模様入りのフェンスを設置。駐車場、夜間照明（21時まで）を設置し、いつでも楽しく見学できるようにした。
- III. 場内の整理整頓をこころがけ、作業員の憩いの場所として「タタミ敷きの休憩所」を設けたり清潔な作業環境づくりとして「シャワー室」を完備した。
- IV. 定期的に現場見学会を中心としたイベントを開催して、一般の方々に建設事業を広報した。



【ログハウス】



【遊歩道】

イ. 見学所の常設展示の内容としては、仁淀川に関する、建設事業の”過去””現在””未来”をテーマとして

- I. 土佐の建設事業の先人「野中 兼山」の業績紹介「八田堰」「鎌田用水路」等、当作業所周辺の土木事業の遺構をパネルにて紹介。
- II. 現在の治水事業を「知っちゅうかよ、仁淀川の治水事業」と題して仁淀川の建設省関連の事業を、河川の流域図と一緒にパネルにて紹介。
- III. 建設事業の未来として、当社の先端技術「大深度地下構想『ジオブレーン』」のパネル紹介や先端技術のパンフレット設置。

を行った。

ウ. また各種イベントとしては、

- I. 見学所のオープンを「地元活性化の一環」として位置づけ、地元町長や小学生に参加していただいて、オープニングセレモニーを開催。
- II. 地元JA伊野と共催して青空市を開催。
- III. 当工事への参画意識をもってもらうため、工事で使用する生コンクリートの骨材へ、見学にこられた方々にコメント並びにサインをしてもらい、最終コンクリート打設時に記入した面が見えるように打設する予定。

Ⅳ、「仁淀川わくわく会議」主催による「第6回仁淀川美化人力テクノおもしろ筏下り」に作業所として、土佐の伝説上の妖怪「エンコウ（カツバ）」の筏を作って参加し、見事「おもしろ筏大賞」を受賞した。

Ⅴ、11月18日、「土木の日」にちなんで、地元の小学生を集めて現場見学会を開催した。

④イメージアップ効果

各種のイベントを行った結果の効果を「青空市」を例にあげて考察してみよう。

1993（平成4）年5月23日（日曜日）、地元JA伊野と共催して野菜・果物・花等を販売して、「青空市と仁淀川・過去・現在・未来」と題して青空を開催した。同時に、集まっていた一般の方々には、ログハウスの見学所内で、「仁淀川・過去・現在・未来」のテーマのもと、土佐の土木事業の先人、野中兼山の業績（八田堰・鎌田用水路等、当工事周辺の遺構）から（過去）、現在行われている仁淀川の治水事業について紹介し（現在）、当社の持つ先端技術（人工衛星利用による測量システム・ジオブレーン構想etc）をビデオ並びにパネル等で紹介（未来）しました。



当日は、高知の三大清流のひとつである仁淀川のほとりという、緑豊かなすばらしい環境のなか、晴天にもめぐまれて、地元伊野町助役を初め、約400名の方々に集まっていただきました。見学に来られた方々は、ログハウスの見学所内の展示を興味深そうに見ていかれました。「南の谷樋門改築工事」がこの地域の人々にとって重要な事業であることを、十分理解していただけたと思います。

このログハウスは、非常に評判がよく「工事が終わってもどこかに置いて欲しい」との声がでたり地元の人に会うと、「筏下りのカッパ（エンコウ）」の話がでで、フジタの人はおもしろいと評判となり、地区の行事や会合によべられたりしました。

〔第6回仁淀川美化人力テクノおもしろ筏下りカッパ（エンコウ）〕

4. 今後のC I Sの展開

当社では、南の谷作業所だけではなく色々な場所で、例えばトンネル工事においては、小学生の見学会や絵画の展示、徳島保健所の工事では「徳島県初のフローティング工法」を採用していただき、きれいな現場を目指す等さまざまなC I Sをおこなっています。その場所その場所において、それぞれ独自のものを「現場」は持っていると思います。この「現場」の持つ独自性をもっと発揮して行きたい。

我々建設業界の仕事は工事が完成してしまえば終わってしまいますが、造りあげたものはいつまでもその地域に残ります。また造りあげたものを残すだけではなく、地元の方々に「フジタの人はみなさんは、気持ち良かった」と思っていただけの仕事をしていきたいと思っています。「地図に残る仕事」から「心に残る仕事」を目指して、これからも頑張っていきます。